

蟹工船

—— 映画文学人生論

原作：小林多喜二 (1929年) 「戦旗」

監督：山村聡 (1953年)

脚色：山村聡

出演：のんだくれの松木 山村聡

撮影：宮島義勇

新船医谷口：森雅之

音楽：伊福部昭

倉田：森川信

監督：浅川 平田未喜三

この一篇は、「殖民地に於ける資本主義侵入史」の一頁である

小林多喜二『蟹工船』をはじめて読んだのは学生のと看で、それ以来、何度目になるだろう。よくわからないが、妙に惹きつけられている。

「おい、地獄さ行くんだで！」という漁夫の声でドラマははじまる。地獄とは蟹工船が出漁する北洋漁業の海だ。蟹工船の監獄部屋につめこまれて、こき使われる漁夫、雑夫の総数は当時、四千人を越していたという。

監獄部屋の区切られた寢床では人間が蛆虫のようになごめいている。そこへ漁業監督が下りてきて、「一寸云って置く」と口を切った。

「この蟹工船の事業は、たゞ単にだ、一会社の儲(もうけ)仕事と見るべきではなくて、国際上の一大問題なのだ。我々……我々日本帝国人民が偉いか、露助が偉いか。一騎打ちの戦いだんだ。……日本帝国の大きな使命のために、俺達は命を的に、北海の荒波をつつ切って行くのだということを知って、貰わにやならない。だからこそ、あっちへ行っても始終我帝国の軍艦が我々を守ってくれることになっているのだ」。

一方、暴風雨で難破した川崎艇の乗組員はロシア人に救われ、反対の意見を聞いた。「ロシア、働かない人いない。ずるい人いない。人の首しめる人いない——分る？ ロシアちつとも恐ろしくない国」と言われる。日本人船頭は、「これが赤



平和ボケ、
欲ボケした現代人よ、
見よこの過酷な状況を！

蟹工船

映画文学人生論

化だ。これで、この手でロシアが日本をマンマと騙すんだ」と思ったが、漁夫たちは現実には安い賃金で、こきつかわれている。ろくに休息もとれない。ついに、みんなで誓約書を取りかわして、ストライキだ！と、立ち上がった。

九人の代表が「要求条項」と三百人の誓約書をつきつけ、そのうちの一人が監督のピストルをたたきおとし、拳骨で頬をなぐりつけた。そこまではよかったが、やがて駆逐艦がやってくる。「帝国海軍万歳」と叫んで、迎え入れると、九人の代表が「露助の真似をする売国奴」と罵倒されて、駆逐艦に護送されてしまった。

ストライキは失敗したが、小説の結末は、「そして、彼等は、立ち上がった。——もう一度！」となっている。その後に附記がついていて、二度目の完全な「サボ」が成功したこと、監督が会社にクビをきられたことなどを伝え、——この一篇は、「殖民地に於ける資本主義侵入史」の一頁である」と、なっている。

資本主義侵入史という学問があるかどうか知らないが、もしあるとすれば、黒船来航も「植民地に於ける資本主義侵入史」の一頁になるのではなからうか。

それに対して、一方では、共産主義侵入史という学問もあるかもしれない。

船底の地獄さ行くべ渡り漁夫